様式 C-7-2

自己評価報告書

平成 22　年 5　月 17　日現在

研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2007～2010
課題番号：１９３３０１１１
研究課題名（和文）現代社会における対人援助に関する社会学的総合研究

研究課題名（英文）　Sociological Studies for Human Support in Contemporary Society

研究代表者
佐藤　恵（SATO KEI）
桜美林大学・法学・政治学系・准教授
研究者番号：９０３６５０５７

研究代表者の専門分野：社会学
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：ケア、承認、セルフヘルプ・グループ、感情労働

１．研究計画の概要

現代社会における対人援助は、＜社会的なるもの＞の衰退と平行して、脱制度化と「新しい」地域共同体へといった担い手の変化、セルフヘルプ・グループにおけるナラティブや、セラピーにおけるカウンセリングの強調といった方法の変化が見られる。

本研究は、主として介護ヘルパーやセルフヘルプ・グループ、地域による自助的な対人援助の営みにおける特徴と変化を調査・分析することを通して、脱専門化を志向する対人援助の背景となる社会構造の解明を行う。また、実証研究を通した現場での課題をさらに探求する。

そのことを通して、＜社会的なるもの＞を再構築していく「共生」の社会理論のさらなる深化を目指す。

２．研究の進捗状況

本研究は、「現代社会における対人援助」という全体テーマの下、現代の対人援助に対して臨床的に貢献可能な社会学的成果を提示することを目指しながら、(1)ケア、(2)セルフヘルプ・グループ、(3)被害者支援、(4)感情というそれぞれの個別研究を推進している。

(1)については、知的障害の当事者たちによる自立生活を支援する団体への聞き取りから、当事者の意思を尊重する際に支援者が単なる「手足」ではなく支援者としての自身を捉えかえすことの重要性を明らかにした。これは知的障害だけに相当することではなく、苦しみの中にある人への支援においては共通の問題であることが示された。

(2)については、医学と心理学の周辺において、セルフヘルプ・グループが人々に自己物語構成を行わせる場として機能しうることを明らかにした。そのうえで、アルコール依存、死別体験、神経難病などの事例において、それぞれのグループが持つ自己物語構成の場としての特徴を分析した。

(3)については、犯罪被害者が社会への信頼感を取り戻し回復していく上での、セルフヘルプ・グループの意義を検討した。また、被害者支援の市民活動においては、「聴く」ことと「つなぐ」ことが、被害者の「回復」に必要となることを指摘した。

(4)については、専門化された支援がその対象を「社会」ではなく「個人」へと縮減させていくという心理主義論を踏まえながら、その限界点であった心理主義的な知の生成と普及のプロセスについて理論的・実証的な考察を行った。

本研究課題全体としては、脱専門家された支援のあり方として、制度、物語、「心」への支援、関係性、当事者性などによる「解決」のみに照準する従来の議論の一面性を乗り越える視点・発想を練り上げつつある。総体として、対人援助をめぐる新たな社会学的知見を提示してきている。

３．現在までの達成度

①当初の計画以上に進展している。

（理由）

当初計画通りに、定期的に研究会を開催し、かつ、年１～２回の集中的なセミナーも行い、全体・相互の研究成果を検討し合う中で、相互の啓発と総合的な視座の構築を図りつつある。それを通して、ケア、セルフヘルプ・グループ、被害者支援、感情の各領域の研究

が着実に進展し、それぞれのメンバーによる雑誌論文・学会発表などに結実してきている。特筆すべきは、本研究組織による『＜支援＞の社会学』(青弓社、2008 年) の刊行である。4 年間の研究期間のうち 2 年目の段階で一定の到達点を提示しえたことは、当初の計画以上の進展と見なすことができる。

４．今後の研究の推進方策

全体として、一昨年度、昨年度の調査についての検討並びに追跡調査を行い、報告書をまとめる。

理論的・経験的な統合のために、内外の社会学者・並びに隣接領域の研究者を交えたワークショップを開催し、最終報告書の取り纏め、作成を行う。

また、研究グループ全体で、＜支援＞・＜承認＞・＜実践＞といった概念・コンセプトを核とした、対人援助を社会学的に捉える理論的枠組みの洗練と共有を、月一回程度の研究会、集中的な研究会で行う。

これらの研究は、研究代表者の統括と、前述した『＜支援＞の社会学』の刊行といった、研究会を通した到達地点の共有という前提の下、研究分担者がサブリーダーとなり、必要に応じて連携研究者、研究協力者の助力の下で推進していく。

研究の成果は、進展に応じて、それぞれ学会・シンポジウムでの発表、学会誌上での発表、グループ全体を通したさらなる編著・メンバーの単著といった形で社会に還元することを目指す。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 15 件）

① 三井さよ「生活をまわす／生活を拡げる――知的障害当事者の自立生活への支援から」『福祉社会学研究』査読有、第 7 巻、2010 年、118-139 頁

② Haruo SAKIYAMA “When emotional labour becomes ‘good’ the usage of emotional intelligence” International Journal of Work, Organization, and Emotion, 3－2、2009, pp.174-185

③ 佐藤恵、「障害者自立支援法の下での『支え合い』」、『福祉社会学研究』、査読有、第 5 巻、2008 年、104-124 頁

〔学会発表〕（計 22 件）

〔図書〕（計 21 件）

① 伊藤智樹、ハーベスト社、『セルフヘルプ・グループの自己物語論――アルコホリズムと死別体験を例に』、2009 年、240 頁

② 崎山治男・伊藤智樹・佐藤恵・三井さよ編著、青弓社、『〈支援〉の社会学――現場に向き合う思考』、2008 年、236 頁